

【千葉薬品社長賞】

あらい かずえ
新井 一江

「まだ見ぬ父へ」

新井 一江

私の父は、昭和19年10月26日戦地に向かう船に乗船中、アメリカの潜水艦に爆撃され、29歳の若さで戦死しました。私は19年2月生まれで、生まれてすぐ父が出征したので父の顔を知りません。母が再婚をしたので、家には写真もなく、子供の頃は義理の父がいたので父の事を思う事ありませんでした。63歳の時、戦没者の遺児の慰霊の旅があることを知り、参加しフィリピンに行って来ました。沢山の遺児と出会い、戦争の悲惨さ悲しさを改めて感じる旅でした。戦争がなければ、遊んだり、勉強を教えて貰ったり、普通の暮らしがあった事でしょう。「お父さんと呼んでみたかった」一緒に旅にも行きたかった。孫を抱かせてあげたかった。今度生まれ変わったら、戦争のない時代に生まれたいです。お墓には骨はありません、名前だけ刻まれています。私が死んだら、バシー海峡の海の底に沈んでいるお父さんに会うため、南の海に遺骨をまいてくれるよう息子に頼んであります。私も74歳になりました。もう少し待っててね。

(千葉県 / 74歳 / 女性 / 無職)

顔も知らない父の事を想い、一気に書きました。